SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

定年退職の記

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-04-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田村, 充正 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/00028163

定年退職の記

田　村　充　正

1994年４月に静岡大学に着任したときは38歳だった。大学の常勤職に就けたのはこれが初めてで、教員免許取得中という肩書きで高校の教員をしたり、ソビエト社会が崩壊する年のモスクワ大学に留学したり、あちこちの非常勤講師をかけ持ちしたり、を経てたどり着いた勤務地だった。それから27年の時間がたって、今年３月に65歳で定年退職を迎える。

静大までが波乱万丈だった。早稲田に入学して最初のロシア語クラスの担任は五木寛之氏の帯で『マヤコフスキイ・ノート』を上梓したばかりの新進気鋭のロシア文学者水野忠夫先生だった。威厳があって気難しいロシア文学者の中にあっていつも笑顔を浮かべていて、大連からの引き揚げを少年時代に経験しているのに、楽しかったよと笑っていた。大学院の指導教員は新谷敬三郎先生。小樽の名家の出で、文学者としての気品があった。その邦訳、ミハイル・バフチン著『ドストエフスキイ論―創作方法の諸問題』は学会を揺るがした。この時代、清水義範風に「いろいろあった」とまとめるほかない。

「いろいろあった」それまでだったので、静大での27年間は今振り返ると平穏な日々だった。なるほど毎年大学の改革をめぐる学科運営の議論や問題ある学生たちへの対応、人事の軋轢や増大する業務など大変だったはずなのだが、還暦を過ぎて極端に衰耄しはじめた記憶力のせいなのか、それが天恵なのか、あるいは走馬灯というのはそういうものなのか、楽しかった光景ばかりが思い出される。所属したコースのメンバーに恵まれたのだろう。採用面接で初めて静岡駅に降り立ったときに改札口まで迎えに来てくださった先生、発表終了後にパリのディドロ大学近くのカフェで飲んだ赤ワインの味も忘れ難い。焼津や静岡市内で志士のように語り合った先生、おそらく二人でひと樽は呑んだ（その三分の二は私が、だが）。伴侶になる方とは知らずに一緒に居酒屋に誘ってしまった先生、ロシアンパブにも連れて行ってしまったか。なんだかどれも酒がらみ。そのせいで去年心臓の手術を受けることになったのだろうが、まあ仕方

ない。寿命である。

　語ることがないわけではないが、なにを言ってもポリティカル・コレクトネスとジェンダー問題に抵触する世代、皆に感謝の意をこめて擱筆。